
建設技術者に求められる継続学習について

建設系CPD協議会会長
東京工業大学大学院理工学研究科
土木工学専攻教授 川島一彦

否応なく西欧型社会に変貌しつつある日本

現在の日本では、学校教育を受けた後、会社に入って社員になるというのが、ごく一般的なキャリアパスであるが、こうした社員としての職種が固まったのは第2次世界大戦後の復興期や高度成長期で、ここ半世紀ほどのことに過ぎない。士農工商と身分の分かれていた江戸時代には、社員に相当する職種はほとんど存在しなかった。武士は本来の役割である戦闘の必要がなくなったため、大方は現在の公務員に相当する仕事を果たしていた。普請奉行という現代の土木技術官僚に相当する職務もその一つである。社員に近いのは商家に丁稚として住み込み、商品の製作や商いの手伝いをす

る職種である。大方は大変な重労働で、熟練職人や商人になった後、のれん分けの形で独り立ちできた職人や商人はほんの一部でしかないと言われている。

戦後、復興期や高度成長期を迎えると、企業は商品の生産や販売に従事する大量の社員を必要とした。地方から多数の若者が上京し、中卒や高卒が金の卵と言われた時代もある。こうした中で、サラリーマンという職種が大量に発生した。植木等のスーダラ節に代表されるように、サラリーマンは、決まった時間に出社し、言われた仕事をこなせば決まった時間に退社することができる。その上、田舎では得られにくい高給が得られた。このため、サラリーマンは

日本人の代表的キャリアパスの一つとして定着し、社員は会社に忠誠を尽くすかわりに、会社は社員に対して生涯にわたる雇用を保障した。親は、子供が小さい頃から大企業の立派なサラリーマンになれるように、一流学校に入るための勉強をせよと子供を教育するようになってきたのもこの頃からである。

時代は巡り、サラリーマンが満ちあふれる現在、グローバル化の波にさらされた企業は、技術力と企画力を視点に社員を厳格に選別し、雇用に値するか否かを峻別するようになってきた。派遣社員が多くなり、他に抜きん出た技術力と企画力を持たなければ賃金切り下げが進む中で、社員も従来のように会社に対して忠誠を尽くすだけでは生涯にわたる安定した雇用を確保することが困難になりつつある。

グローバル化の進展とともに、社員も技術力と企画力を持たなければ、エンプロイアビリティ（Employability：雇用に値する価値）を持つことができなくなりつつある。表現を変えると、大勢の中の一人として大勢に従って動いていれば良かった社員ではなく、個の確立したアイデンティティを有する専門家になっていくことが求められている。工学院大学の橋本秀雄理事長によると、我が国では、名刺には〇〇会社の△△部長の××ですといった形で自分を表現するが、欧米では、自分の名前の下に自分が持っている資格や加入学会名を示し、その下に、所属する企業名や役職を入れていると言う。会社名を示すことで自己のエンプロイアビリティの証明になる我が国と、客観的な資格で自己のエンプロイアビリティを示そうとしている欧米の違いをよく表している。

現在、米国では、個人や少数のグループによる起業が我が国に比較して圧倒的に多

い。マイクロソフトのビル・ゲーツ氏をはじめ、こうした起業により財をなした個人が多数存在する。米国で起こった現象は10年から15年すると我が国にも起こってくると言われるが、これは社会システムや価値観の変化に伴って、他に選択の余地のない変化としてその現象が浮かび上がってくるからだと言われている。我が国においても、従来型の社員では賃金の切り下げが進行し、他に抜きん出た技術力と企画力を持ち、個の確立したアイデンティティを有する専門家になるか、起業するかしなければ、自分の能力にふさわしいと考える待遇と賃金を得られない時代になってくるのではないかと考えられる。

なぜ、継続学習が求められているか？

上記の時代の変化から見れば、なぜ、継続学習が求められるかは自明であろう。継続学習は、会社人間からプロフェッショナル・マインドにアイデンティティを転換していく基礎になると同時に、技術者の社会的地位を高めるために重要であるためである。

建設技術者はプロフェッション（専門職業）に属する専門技術者（プロフェッショナル）である。プロフェッションとは、他のグループにはできない高度の技術を持ち、その分野で大きな貢献と責任を持つ職業を指す。プロフェッションの代表は医者や弁護士といった国家資格に裏付けられた業種で、専門以外の人間が関わることは許されない。プロフェッション内では厳格な倫理綱領を定め、これを遵守することが構成員に求められている。専門職としての業務は、営利追求だけでなく、社会に貢献するという自負と使命感を求めている。

倫理綱領を持ち、これに基づいて行動するという事は、社会の信頼を受けて、社

会に対して貢献する専門技術者であることを内外に明らかにするものである。高度な知識と技術を駆使してどのように業務を遂行するかは、当該技術者の裁量に大きく委ねられているが、技術者は与えられた条件の中で最善な判断をして目的遂行に当たる使命と責任を負っている。プロフェッショナルはその見返りとして、社会から高い社会的地位と報酬を与えられる。

建設技術者は高度な技術を駆使し、環境の創造や生態系の維持をはかり、安全・安心な社会の実現に向けて良質な社会資本の提供や運用、維持に責任を負っているプロフェッショナルである。プロフェッショナルであるためには、これが長い教育と学習により確保されたものであることを客観的に国民に示す必要がある。また、建設技術は高度に進化しつつあり、技術的進歩を積極的に取り入れてプロフェッショナルとして常に十分な力量で社会に貢献するためには、大学等やその後のOn the Job Trainingで学んだだけの知識と技では不十分である。このために重要になってくるのが、継続教育（Continuous Professional Development：継続的能力開発でCPDと略される）であり、これを学ぶ側から見ると継続学習ということになる。すなわち、継続学習は、技術者がプロフェッショナルとしての品質を向上させると同時に、国民や社会に対して、自らの品質保証をするた

め的手段なのである。

建設技術が高度化し自然に働きかける力が大きくなるにつれて、継続学習では専門技術に加えて、技術が自然や社会、国民に及ぼす影響等を自ら判断すると同時に、技術者として何をなすべきか、何をすべきではないかを判断できること（技術倫理）が求められるようになってきた。

継続学習の重要性は建設技術者だけではない。昨今、若者の理科離れが問題になっているが、技術者を医者並みの魅力ある職業にするためには、技術者がプロフェッショナルとしての能力と意識を持つと同時に、集団として社会的認知を高める必要がある。医者は治療行為を通して直接患者と向き合い、専門知識や技術を駆使して患者に尊敬される。技術者も専門知識や技術を駆使して社会に貢献しているが、残念ながら、我が国では社会の技術者に対するプロフェッショナルとしての認知度は医者には及ばない。

この原因にはいろいろ考えられるが、技術者がプロフェッショナルとしての高い専門知識を十分身につけると同時に、自分の属する集団や組織のためだけでなく、高い倫理感を持って国民の安全や公益に資するという意識を共有し、これが社会的に認知されることが技術者の地位向上のために重要である。